

ガンダーラ派の佛傳浮彫の手法

山 本 智 教

所謂ガンダーラ派の彫刻は浮彫の群像と單獨の尊像に二大別し得るが、その中、浮彫は殆んど全部釋尊の連續的な傳記であり、石に刻まれた「佛繪傳」といつてもよい。しかしながら時としては、佛の生涯の特定の挿話に屬しないものもある。例えば、佛が施無畏印又は禪定印して坐し、人々が禮拜している圖とか、チャイトや切妻と柱列の間に佛像をあしらつて單なる裝飾とするものである。尙圖相不明のものもある。一致する經説が尙發見せられないか、又は彫刻そのものの破損が甚しくて斷片である場合もある。然し佛又は佛教に屬しない浮彫は殆んどない。ガンダーラ派の浮彫はその尊像と同様に殆んど全く佛教のものである。しかし稀には裸體の男女が寄添つて酒をのむ圖もある。フッシュエはこの様な酒宴の場景をもつてギリシヤの酒神ディオニッスに關係あるものとし、その理由として葡萄が現われる事を指摘する。しかしながら酒と女に關係あるエロティシズは古代中印度の記念物にもしきりに現われている（例えば佛陀伽耶欄楯、サーンチー四門）。葡萄もガンダーラに限らず、既にサーンチー西門石柱やクシャーナ時代のマトゥラに見える。だからこの様な場景はガンダーラの謹直な佛教徒の目にどう寫つたにせよ、根深い印度のエロティシズムの一つの示現と見る事も出来るわけ、強いてギリシヤと結びつけねばならない理由はない。

ガンダーラ派の佛傳浮彫の手法（山 本）

浮彫に出る事件の舞臺は殆んど皆中印度にあり、傳説は多く恒河流域に發源する。唯一の例外であるカールカ龍の調伏や燃燈佛の話はガンダーラ派の領域で起つた事になっているが、それらとて萌芽は中印度にある。傳説の或る場面は既に中印度系美術において簡單に、又は精しく表現されていた。ガンダーラの美術家は更にそれを發展せしめて、小さな出來事でも表現するに努めた。これがガンダーラ派の佛教美術史上における寄與である。

浮彫の彫り方はかなり深いのもあり、又浅いものもある。大抵中央部に世尊をおき、その補役を左右均齊に並べる。左右均齊は人間の美觀の根本要求の一つであつて、必ずしも外國の影響とはいえない。その意圖は信者に對する教訓にあつて、信心を倍增させる様に出來ている。だから非常に眞面目であつて、單調な程にいつも忠實に同じ場景をくりかえす。同一場景の型は一つか、精々二つを出ない。しかしながら、その表出の技巧はたしかに古代中印度派よりも進歩している點もあるけれども、それにも拘わらず、人の心をつつ生々しさはない。たとえば、降魔圖はガンダーラでは極めて雄辯であつて、美術家は傳説に従つて、その欲する所を自在に表現している。しかしそれでも、サーンチーの北門に見えるあの素朴な降魔圖程人に訴える力を持たない。

同一構圖においては、前景にある人物を大きく描く。だから重要人物は當然みな前景に押し出される。後景にあるものは大抵上半身をえがくのみである。彼等は前景の人物や物で隠されている。前景を大きくする事によつて距離感を出す。一方又佛を常人よりも大きく描く事は到る所で認められる。佛は段々大きくなつて行く傾向にあるが、その大きくなる度合をもつて直ちに年代の新古を決定する事が出来るかどうかは問題であらう。飛天などは畫面の一番上にあるから、後景の人物にすぐ連なるわけであるが、その動作や運動の故に見紛う事はない。又、古代印度の畫面には隙間はないが、こゝには適當に隙間をのこす。ガンダーラ美術家は隙間の効果を心得ている。佛傳浮彫は裝飾的というよりも敘事的であつて、これを拜する信者は有難い事件の内容を理解する事が出来たのである。

ガンダーラ美術には自然の風景の描寫が少い。中印度系美術に芳香を放っているあの自然愛や動物愛はこゝには認められない。例えば人間も自然の一部でしかない様なサンチーやウダヤギリとは著しくかけ離れている。動物描寫にかけてはガンダーラは到底中印度に及ばない。物語の場所を明示しない事もガンダーラ派の一特質である。場所の現はし方は極めて簡單である。これに反して豊富なのは人物である。物語に直接重要でないものは省略して人と人の動きを描く。これは又一面には盛んな單一像の製作として現はれる傾向である。

中印度に認められる素朴なエロティシズム、人生の歡び、自然な人間像、世俗性はこゝには出ていない。すべては冷厳でまじめで、出世間的である。すべては佛陀という超人に志向せられる。まことに敬虔ではあるが人間的ではない。

中印度の浮彫は欄楯や柱の縦の區劃に多かつたが、ガンダーラ派では水平の繪様帯が多い。この事實をフッシュェはヘレネ化の影響と見たが、縦とか横とかいう事は浮彫が裝飾しなければならなかつた記念物の構造に依るのである。例えば塔の基壇や圓筒部の基底における時は、いやでも右邊の方向に沿うて右から左へ横に並べねばならない。これは撤頭撤尾印度的な建造物である所のガンダーラの佛塔の構造上の自然な歸結であつて、そこにヘレネ化の影響などを許すことは出来ない。尙、同一畫面において主人公の行動の各段彫をくり返し現はす事は本來の中印度派の用いた手法であつて、ガンダーラ派はこれを襲踏した。

浮彫は大まかに言えば、佛敎の諸傳説を再現したものであるが、精しくいえば、細部においては傳説と合致しない點もあつて、同種の傳説を有する色々ちがつたテキストと同じく、もう一つ別の本ともいふべき價值をもつ。決して或る一定の書かれた傳説を忠實に再現したものではない。これは浮動していた傳説の一つ獨立した繪本である。だから浮彫も佛傳文學研究の好資料をなすと考えられる。しかし浮彫と文獻がちがうという事は傳説の動搖のみならず、美術家の想像および表現の難易による増廣又は省略の結果でもある。

關係文獻

A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique du Gandhara*. Tome 1, 1905

Hargreaves, *Handbook to the Sculptures in the Peshawar Museum*. 1930.

H. G. Majumdar, *A Guide to the Sculptures in the Indian Museum Calcutta*.